

ハイデガーにおける死と共同存在 「死へと関わる存在」から「死すべき者たち」へ

廣田 智子(山口県立大学)

死すべき定めにあるわれわれが能く死ぬとは、いかなる事態であろうか。人は誰もが死ぬ。「他ならぬこの私が死ぬ」という事実は他者によって代替されることはできず、その意味で死は各人を自ら固有のあり方に直面させるものである。だが、ひとりの人間が死ぬということは公共的なものを否定して私的実存に帰還することによって成り立つのではなく、各々が能く死ぬということは他者たちとともに住まう場の広がりにおいてこそ、はじめて論じることができるのでないだろうか。

本発表では、ハイデガーの「死」の概念の解釈、『存在と時間』(1927)における「死への存在 (Sein zum Tode)」と後期の「死すべき者たち (die Sterblichen)」の概念の解釈を通じて、われわれの「死と共同」の経験を現象学的に解明することを試みる。ハイデガーの思索において死は、『存在と時間』では「死への存在」として、決意した現存在（個人）の生の全体性を論じる文脈で取り扱われ死の各自性が強調される。後期に至っては、人間は「死すべき者たち」として規定され、死が複数形で語られ、われわれが住まう歴史的空間のなかで論じられる。

死をめぐるハイデガーのこうした洞察に関して、様々な論議が展開されている。例えば、死は人間にとての共同の出来事であるとして共同性のなかで死を論じようとする解釈がある。また、『存在と時間』における死の各自性に政治的な次元を接続して読み込む可能性を示唆しつつも積極的な共生の次元は死からは生まれないと、死ではなく誕生のうちに共同の次元への足がかりを見出そうとする議論もある。

しかしながら、ハイデガーの「死」の概念は先行研究において、共同存在の広がりにおいて捉えるべきであるということは指摘されて様々に解釈が試みられてはいるが、なぜ死を複数形において語らざるをえないのかという、死と共同との関係はまだ十分に明らかではないように思われる。この点を明らかにするために、本発表では、次の三点を検討する。

第一に、「死すべき者たち」概念の解釈を通じて、われわれ人間が「死すべき者たち」であるとは如何なることかを明らかにする。死すべき者とは「死を死として経験しうる者」であり、われわれに呼びかけてくる存在と、死と言葉とは密接な関係にあることから、死と言葉とのあいだには本質的な関係があると示唆される(GA12, 203)。人間は死すべき者であるとはいえ、われわれはまだ死を能くすることをなしていないと言われる。あるものを能く成しうるというのは、「そのものをその本質をうちに守ること、そのものをその在り處のうちに保留すること」(GA9, 317)である。そこで、「死を死として能くなしうる」ということの内実を明らかにするために、「死すべき者たち」という人間の本質を言語との関係で明らかにする。「言葉は存在の住処であり、そのうちに住みつつ人間は、存在の真理を守り存在の真理に属することによって、実存している。」(GA9, 333)、と言われる。人間が実存する次元を拓くのが「言葉」であり、この言葉を介して死すべき者たちが住まうことが可能となるので、言葉を介してわれわれ

が住まう空間が開かれるというその構造を明らかにする。

第二に、ハイデガーにおいて「死へと関わる存在」から「死すべき者たち」へと、人間の本質に対する死の規定が変化していく道のりを、哲学において従来「主観」と捉えられてきた人間存在に関するハイデガーの把握の変化と重ねて考察する。『存在と時間』においては、後にハイデガー自身が述べるように、人間を「現存在 (Dasein)」と規定し、存在が開示されている場から捉えようとしつつも、なお能動的な「投企」の側面を強調することで主觀性の残滓が拭いきれていない。これは、基礎的存在論の構想のなかで現存在の存在の全体性を確保して提示しようと、個人の死への先駆的決意をもとに現存在の全体性を構成しようとすることに起因する。現存在の存在は元来、贈られて与えられるという受動的な契機が深く浸透しているものであり、その全体を見通せるようなものではない。現存在が「現-存在 (Da-sein)」(GA9, 327)と捉えられるようになるに至って、われわれが存在のうちへ投げられたものであるという受動的な「被投性」の意味付けが変容し、われわれへの存在の与えられ方の構造が変化していく。ハイデガーによる人間把握の変化と重ねて、死の洞察の変容を検討する。

第三に、これらのことから、「死を死として能くすること」とは如何なることかを明らかにした上で、それがわれわれ人間の振る舞いとどのように連関するのかを考察する。後期のハイデガーにあって、「言葉」を介して存在は自らを与えてくるものであり、人間はそれを見守る者とされる。そうであるとすると、各々の人間がいかにあるかという態度は、存在の在りように何ら影響力をもたないのである。それとも、われわれにとってはわれわれがいかにあるかという態度によって、存在の与えられ方は意味のある差異をもちうるのか。この点を検討して、死すべき者たちとしての人間がいかに振舞うことによって死を死として能くすることができるのかについて、明らかにするよう試みる。そして、死と共同存在との関係について解明したい。

参照

Heidegger, M. (1927), *Sein und Zeit*, Niemeier.

Heidegger, M., *Gesamtausgabe*, Klostermann.

Bd. 9 *Wegmarken*, 1976.

Bd. 12 *Unterwegs zur Sprache*, 1985.

齋藤元紀 (2005) 「脱目的共同存在—ハイデガーの「根源的倫理学」をめぐって」『現象学年報』(21: 119-126)。

森一郎 (2008) 『死と誕生：ハイデガー・九鬼周造・アーレント』、東京大学出版会。